

伊与原新・作 「夢化けの島」 より 抜粋

地主の妻だという女性を先頭に、腰まである草木をかき分けて行くと、けもの道が現れた。これはさすがに気づかない。

進むにつれて行く手が開けていき、軽自動車が通れるほどの山道になった。草むした道は山腹を横切りながら、わずかに上っている。

「この山のことも、おじいちゃんならよう知っちゃったやろうけど。わたしが嫁いできてすべ^のうなっ^てしてもうて」

七十歳は超えているであろう地主の妻は、歩美より足が速い。五分ほど歩くと、「確かこの辺」とつぶやいて竹藪を見回し、歩みを緩める。

「ああ、そこじゃわ」

彼女が指差したのは、左手の緩やかな斜面を少し上がった辺りだった。藪の隙間をよく見れば、四、五メートル向こうに、平たい石が積まれた段差のようなものが地面からのぞいている。

「これか——」光平が真っ先にそこへ駆け寄る。歩美たちもあとに続いた。

段差の幅は二メートルほどで、ところどころ崩れている。しかも、角の部分以外は土に埋もれていて、よほど気をつけていなければわからない。

地主の妻が斜面のさらに奥を指差した。「あの辺に、もう二段ほど出ちよる」

それを聞くやいなや、光平が竹の間を縫って駆け上がった。身を投げ出すようにして地面にかがみ込み、興奮した声をあげる。

「間違いない！　これ、そつだよ！」

振り向いて足もとを指差す光平の位置まで、ここから十五メートルほどか。

「あつたんだ……ほんとに」驚きに、惚けたような声しか出ない。

「こんなところに階段は作らんじゃろうし、何やろうと思うちよつたんよ」地主の妻が横で言う。「まさか登り窯やとはのう」そう。これは、二百年前に林泥平が築いた登り窯の跡なのだ。

壁や天井はもちろん残っていないが、階段状の窯の床だけがどうにかその形を留め、ここで土に埋もれていた。

篠田によれば、こうした江戸期の窯跡は、本土の萩市内でも
時どき里山のふもとなどで発見されるという。

泥平の粘土採掘地点がわかれば、同じ場所に窯もあるはず。

光平は、粘土そのものよりむしろ、この登り窯の跡をさがして
いたのだ。

リュックを下ろし、軍手をはめた。作業は長丁場になりそう
なので、地主の妻にはよく礼を述べて帰ってもらった。地面を
少しばかり掘り返す許可は得ている。

二人で窯跡とその周囲をよくあらためていくと、最下段から
二メートルほど上った右手の地面で、土から何かが顔を出して
いるのを見つけた。掘り出してみると、直径十五センチほどの
石柱の一部だ。

「テンビンのかけらだ」光平が言った。

「テンビン？」

「窯づめるとき、器を並べる棚だよ」「この石柱を支柱にして、
円盤状の棚板を積み上げていくそうだ。

「それがあるってことは、この辺が——」

「うん」光平がうなずく。「捨て場だったのかもしれない」

登り窯の跡が発掘されると、たいていそこから、細々とした窯の廃棄物が出てくる。そしてその中には必ずと言っていいほど、失敗作の破片が入っているのだ。

つまり、泥平が彼の最高傑作を焼き上げたとき、同じ窯の中で不運にも割れてしまった茶碗も、おそらくここに埋もれている。

光平は、そんな紅萩手の陶片を、泥平の夢のひとかけらを手にするために、見島へやってきたのだ。

その泥平の茶碗を夢想しながらこの世を去った父親のために。